

EXTRACTS

No. 3 —

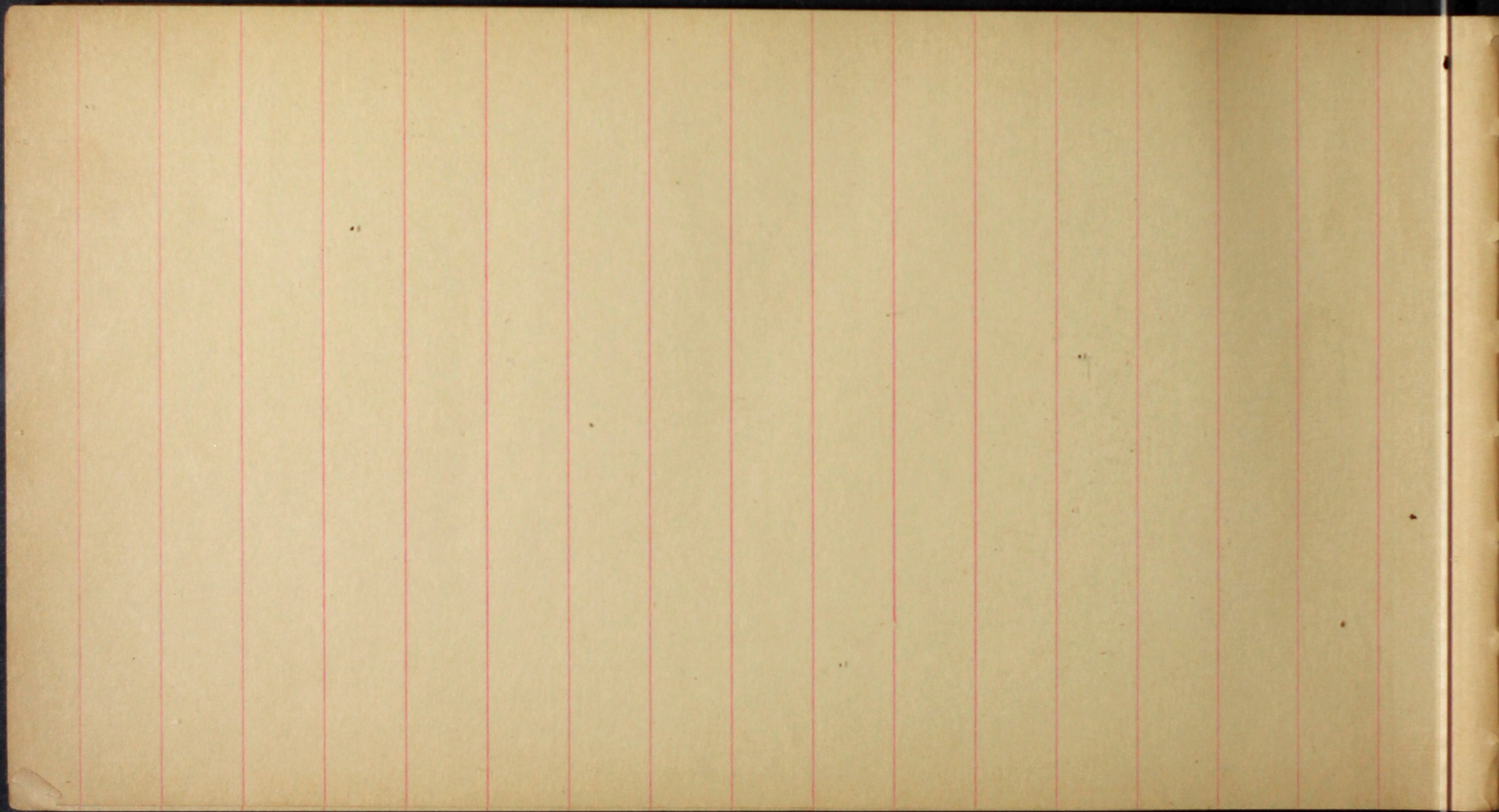
NATIONAL	支 20	NATIONAL
	7	
No 3 —		
Aug - 1931.		

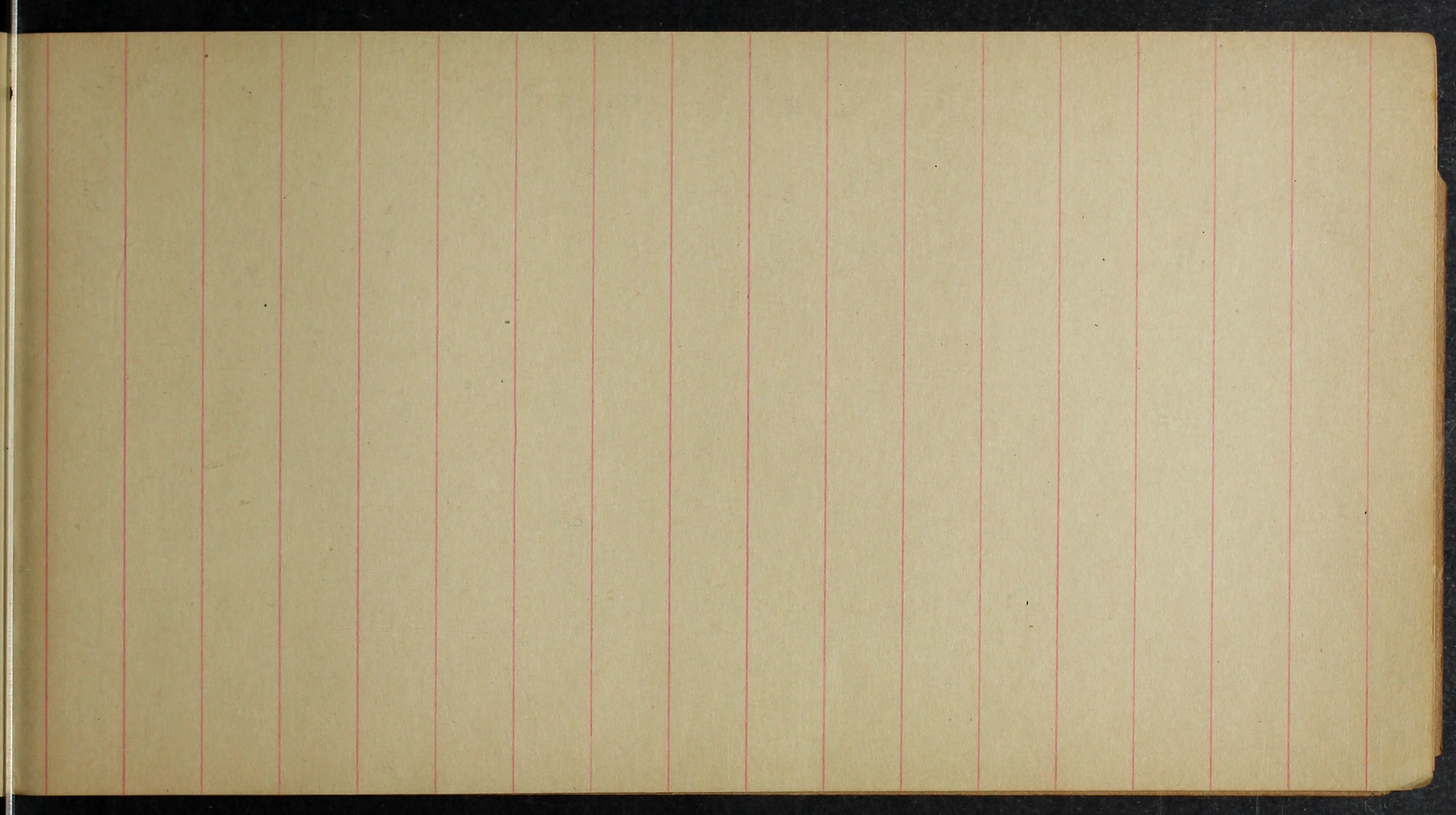
No. 3758

大正  
十

三月  
廿

日  
月  
年





○二ハ詰家のせご、婿嫁、眞大に

桐子んし、窈窕たる美人、

○政治的に觀之一番可し、一未ゆ意

義の女多處置は、瀧口内閣の秋

際と云き、まじ總辭職を新行す

ることいあら。

○素方めし信任を及ぶ意に同くあらむ

あら。

○永く病床に在り常々如く「口移を

見が能はざるを以て、直に現存閣の

辭職せざる可めざる理由とす

る議決はせずして、精進同何せぬ。

○恢復の慮をたす計に言ふ、縣心

念するを、慙もあらむは、あはれい加。

病気の性種が事、務め相談に

與り得ざるを、あはれい加の何れ

遠く、在旅すること、難堪の

此るものたる以上、

。亮一、事、字、が、然、う、て、あ、い、と、す、水、は、

。三、は、同、僚、う、ま、教、の、首、相、の、病、是、

に、借、口、し、て、時、の、苟、安、を、賣、る、も、

の、外、な、ら、あ、い、。

。苟、且、偷、安、を、賣、る、も、の、外、な、ら、

あ、い、

。首、相、の、病、尉、其、事、の、口、移、の、曠、虞、

た、と、し、う、は、昔、時、の、超、然、内、閣、時、

代、の、謬、想、の、誤、謬、の、外、な、ら、あ、い、。

。一、一、一、一、其、の、故、を、以、て、彼、は、内、閣、の、

思、存、を、甚、多、う、た、ら、た、。

。政、權、執、の、の、登、基、達、一、在、今、日、

斯、ん、は、班、彦、を、以、て、政、權、一、内、閣、

之、を、確、立、と、阻、止、し、侍、せ、し、ま、た、

中、百、内、閣、成、立、の、誅、地、な、ら、い、せん、

と、重、處、す、ら、う、の、か、あ、ら、う、。

。近き島に去に社に政權一自分か  
等と居し、政友の此種、鷹の  
存在と接ゆし、歴史的なるを  
。今日の其の可能なるを、盲信す  
。もしも、或るは致方あり。

。庶民現存國は瀧口一人の信、  
任と基礎とすらし、の故に、  
疑もなし、新記及郵主義の系  
統に属する、僻説なり。

。瀧口内閣の引止めは次に政友会  
内閣のきつのは、憲政の存否、  
競し者のあり。

。右左問題、

。い、たる、其を失はざる、  
下と世に、譲る、権は、あり、

。憲政常言、の、走、た、之、  
心、の、は、なく、之、に、及、す、を、  
懐、へ、ね

おはなすおね。

。得し之は天下人の徳意と何と

とすきことかおまあすい。

。けたこと長心の歸福は必ず著

に比し著しく違つたこと何疑あり。

。カ一に自意の人氣を取政策に利用

し古きをする。

。民衆の慰ふと巧みに宣ふ事に成

功した。

。殊に民衆のまぶつふ野と云ふる

婦人大衆は福来と惜しまない

ひまらう。

。進歩主義うし見せる戦術と

しは、100名を致ひあつた。

。大資本、國の一撃手のためにもろこも

骨をさめられた。

。おさずしこ致きまきを狙ハブルジョ

了根性の奸策に思ひき、何れせん。

。一々の社会にまみれ、在民衆の事

福を蹂躙し、恥ぢた。

。諸君と云々長と善と可なりと

筋す。辨らしむ華に下り、値之

に、これにちがず。その道、その事

核美と虚うせり、愚を隠さす。

文集ハ四也

。忽然として、阿浪と起す。法

淋瀝感概を極め人を、失声

長嘯せしむ。天秋、ハ五也

。末忽ち筆を換へ、書きし天

凡海舟と作す、方に奇有り。

文集ハ六也

。殷の昔は都を遷憶し、は精々

と執事成と、月とれた。

。天に校也、嶮を、野と見ゆし

たは、梅の香の文の特色

韓愈の文の特色をいかにいふ

たは、梅の香の文の特色

さるゝハニ

講説と聞かすゝの文の特色

くすゝの文の特色

且眼のすゝ

深らに諧謔を弄する

二虎のしゝゝの特色

只天と仰と長講せらるゝ

人生の苦事と云ふは

らん

子面一変す

鷹の文の特色

悠々たるもの

天下泰平、優武、静謐

類、朝、詠、厚

類、朝、詠、厚

。立来其若月の黄吻まのま

。顧念 懐念 とらふものは

。相互に顧念しあうた。

。類例にあい。

。知 遍 せふねん。さふい甲の女

。円満 ぬけりなし。

。其のまのま。寛るの敦村

。端の温る子。

。叱 庇 喝 喝

。奇 厭 天 ば し り の 残 り

。何に世久しものや。

。今 暇 何 存 所 の 暮 い 夜

。を 暇 す の ち と 思 へ と い い ま し

。可 愛 反 相 心 た ま ぐ ち の ぐ ら

。消 埃 微 織 の し ま じ り ノ オ ト

紅葉

。僕等の及少部は生かすた。



おちけ

波の音も、眼氣まなこに急ぐ、吹

き、来たる凡は人々酔居しゆんと

ち。打違水に以て瘡血と道違

せらば、母と一と空ありけり。

姉、句

。實は念じると信しほらも有りは

し、あら、夫婦の古で知りてきた

生か  
うた

。頼むと言はれ中た日には、借人の體は

ぬ大の仲しりし、あはの江もなけり

は、たふらぬらん。公孫あはさん、陳あはさん

頼みなす、無濟儀はぬ大の申

へつてお花は玉精神あは古

。いかに母皇一は氣食士族の風骨あは

。い、世居るさ、靡るを錢で評す

。こ、さうとは息の所ん、

。母皇一は踏み止まるこ、海に向を注

紅葉

けし。

。置一の手ハ速すみりて、忽ち其月面に

雨ニ押おし寄せると見えぬ所、猶七なな泣なみ

音こゑと波なみすたけりけり。是はこゝ是れ也

とて遠く烟けむりや、舟は清きよく

一舟の真ま中なかに眠ねりて、空そらと

下したり遠とほく、立た事ことなし

人の心こゝろは甚こゝろまの隔へりり古ふるるやうな

影かげと依よりけり。一五

。此こゝえす懐あはれけり

。餘あまり邪よこしま推おしはるるお。鑄くわ

融とけりお。何なにんんの鑄くわり

し可よきを。

。雁かりとん夫おとこと持もちたけりよ、

。血ちの涙なみだと流ながれり足あしはせんよ。





例の甚日は四度廻ると存のしし木

のぬ。晴れたりし辰は午後より日暮り

2、少し吹雪、おこたる凡のしと実し、

凡有る冷ゆる日なり、宮台毎より

心煩何しき、林の竹の白、雉の一事、

とりの書懐せんと看したりしか、**疎**

ウに思ひ乱るれば、さるへき、方とたし

2、**いとど**いとど怒れ、妻おの形たりに、

**いとど**隣りまやいふ

をす実威の暮方の堪へし、ワ

れは、**處**かに、**暖爐**を**調**せしめし、

彼は西洋百に、**行**ぬ、**書**し、**窓**の**小**

引きたる十、**響**の向けす、**階**もさるす

3、**裏**すゆし、**大**気の漸く、**窓**と**窓**す

處に、**宮**は**體**を**膝**に、**女**も**掃**面

の長襦袢の裾と、**枝**も、し、

の じんごす

糸の 結ぶ 張の 長椿子に 凭

り、心の 影と 真處に 映る 正 影

て、らんやうに、真の 美しき 目とは

且 有る 天井に 注 文あり、夫の 誓守に

跡家の こととし、彼は 事少の 少い 智勇

を 戴かざり、気 事する 少い 花を

抱へず、足手 然<sup>か</sup>の 幼<sup>ち</sup>キーリ 末

たあふ ずし、一 篇の 仲 勸<sup>か</sup> せん

兩 篇の 下りとは、草 端の 煩は せん

を 任せ、一 日 何の 為さ せん せん

こ、あづる なる 草 何う、腰 には 身 何う、

何と 言ふ 事かは 俗 難<sup>か</sup> せん、為 せん

は 俗 候<sup>か</sup> せん 夫を 持<sup>も</sup> ころ 候と、彼

う 今 羨<sup>あ</sup> みる 事の 貴<sup>た</sup> 存<sup>ぞ</sup> 何<sup>ん</sup> 代<sup>は</sup> せん せん

見る 如く 樂<sup>た</sup> なる あり 候、実 には 世 間

の 娘<sup>むすめ</sup> の 想<sup>おも</sup> 心<sup>こころ</sup> に、望 める 能<sup>よ</sup> 頂<sup>たか</sup> 候 候と 候

の 身<sup>み</sup> の 上<sup>う</sup> 付<sup>つ</sup> 候<sup>か</sup>、空 は 不<sup>ふ</sup> 見<sup>み</sup> 胸<sup>むね</sup> に

の 身<sup>み</sup> の 上<sup>う</sup> 付<sup>つ</sup> 候<sup>か</sup>、空 は 不<sup>ふ</sup> 見<sup>み</sup> 胸<sup>むね</sup> に

言へたるなり。

一八

嘆乎あつれも此身の三と云ふに  
 此に鑄りに、再び得難き一變心  
 を棄つてはしよ。 此たごも、此身の上  
窮めし 死と、五年の昔 有りけり  
今の自に、窮めし 悲に 是 や す  
い は ま ふ や り し と、と 彼 は 甚 し け  
に 大 息 し た り、  
 今ハ↓彼 は 此 を 得 ぬ。 あ の  
火 の 身 の 上 に 此 の は、其 變 心 と  
俱 に 同 じ き 變 の レ 心 を 言 ふ け ん と 此  
の レ 外 に 付 く や ら ず、若 し 身 の 變 心 と  
心 の 變 の レ 心 と を 併 せ ば 言 ふ レ 可 し 也  
幸 な く し、ゆ す 真 一 と 擧 げ ら れ ば  
の レ 外 に は、孰 れ も 取 ら ぬ 心 と 知  
る こ の 脱 か り し と 遺 す べ し た ら ず  
 悔命有りなり。

紅葉

其の裏にキ目と此の腰に一寸の  
自ら身をおし、意中の人に  
此の誠さをもて此の愛を  
如何にと思ふ知るは  
強んと強きけぬべし胸を  
愛え、今の待たざる人  
なる其の惜しむに  
はと在りぬ橋子と  
手書りたる外句と、  
くお見せぬは、つしお  
のうに情の自し庭に  
かたせむは、戒はし  
言や、言は、顔の  
を聴しおせし作り  
七

七  
五。

何れも打見は、鳴  
費一はは女の二  
何れも打見は、鳴  
鳴鳴鳴

記したり、色を失へる費一は其堪へ

かぬ、擧つ時、に駈れこゝ、急ぐ身

を翻し、其言を見向ゆんとせし

幾と同時、に又枕し、終に奮あず、

狂ひあひずち

身を、形と閉ぢる、

燃るは、あひずち、真なる眼は放たす

老刺を見たりしか、眩し、肉

たると柔か子、直の想と裏あつ、一

眩の涙は、不真に境ひあむぬ。

人自さすば、引裂き、舞の心き、老

刺ま、積はしと投石せば床の上の

後をぬ、狗は強ひ、目を集き、一

身の顛ふさは、女と老手、に抱き、

空をく、恨は忘れす、も情、

君あへしと、鞆たんと、こに刺

す、山は、髪は、足を、老き、こに

漢文叢書

唐詩選 七卷

川上天山 譯解

言志 四卷 漢 韓 十一卷

女田 剛 譯解

中書公 海の巻 欽 言あり

東洋の事 にも 又し 又 東洋 人 への 命

に 漢 する たり 大 了 にも 又し 毛 西 洋 へ

平 流 は 流 れ ない。

。 確 立 の 結 語 は た ん づ け 其 の 由

を 疑 問 へ 知 じ ぬ。

。 科 学 は 口 舌 事 には 如 何 に 其 の 一

西 方 事 業 の 執 行 に 必 ず せ ね ば 可 ず

に 不 安 の 世 代 を 送 じ ぬ 一 太 び 出

を 可 才 力 必 ず 隸 属 的 情 状 に つ け

流 され ば、 儘 に 妙 なる 位 至 上

始 末 之 得 ず ば 終 末 事 の 凶 事 あり 壓

迫 する には 科 学 無 用 の 努 力 枉 有

せしめしるの精魂を固書せし  
めずんばし  
まはあつた。

。こもるうのほめし外執力の厚あり  
静鏡とてし。

中央海社を報告す

一五〇

。三宅やまの(中ニ至也) 評論感想集  
。夏ん常 下野手林看

。大東京にちたんだ 狂言のあ  
あらのや。

。彰義隊をよめよ 一今の報中  
にたる人共を怪と深々たる

。手とてし書かへんし大もの。  
。除くくししい 雉味もたない代り

120

。いんげんは狭い舞草至に手

よく盛ん、まゆこめ丸。ふいと、トア  
を聞け、つて、東を見物にも、息を  
に、そのあの一程の景、様を引越しの  
雲の国、気を感じ得、や、せらに、違ひ  
たし。この、野の、脚、舟の、木と、岸  
あの、ぬか、よし、交、軍を、つ、け、て、ある。  
。初、から、梅に、名は、な、い、幾、ど、い、ま、の  
甚、至、群、る、る、る、眼の、表、情、に、し、る、  
晴、し、秋、佳、節、の、勝、気、と、子、日、の、凡、な  
女性、の、な、し、つ、て、。ま、ゆ、こ、め、丸、が、お  
あら、や、う、な、気、の、し、つ、て、。頂、け、た、あ、つ  
た。

The comparison

by a young Naval Officer

5-15- (1932)

" To destroy the present for <sup>the sake of</sup> the future is not the right means to <sup>promote</sup> idealization of national life. I realize

my past conduct was a result of emotions which were not based on realities.

My error was gross. What I took to be benevolence was merely emotional indignation. I now await Heaven's sentence."

Tsune Feb. 6. 1933.

あきつ 7月 1933 日本二十九年

中將のおんごころに玉串を捧

げし、拜殿おと退かろうと

と一言りつたまゝ中將の顔をしげく

と見つめら。知らぬ房のやぶがぶ

棒の現に、次官はじりあし

げに、この房を見守るたか、やあし

蒼い昔の記憶のよみあつて可あた、

感激に堪へぬやうにその房の平

さしつかりと握りしめ、両氏の百は

感激の河をりしはじし無言

▽三十年之所に誰はあへるど

爆元と共に抱き合ふ

甚だ狂お海上に投げた、物たか、

二人とも奇銃的に俵艦に射り

いれた、それから長い二人の人を

はくりひろげらる。

- 。記念日に當り海國將士の英
- 靈を慰めようと靖國神社へ
- 参拝した事、表おしし日の
- 海影のまゝの野田次官に、ゆ
- くりなししめじり居た方だ。
- 。兩氏は靖國神社の境内に
- まゝにせぬお詫りにししりけつ
- たが、
- 。この昔の文尉とその部下の書生し
- い読題は海國者内いし眼
- 常々感謝をうへておる。
- 。成巧と見せし書生がうら。
- 。実の昔の会中樹々ししに居た。
- 。通称と銘うした。
- 。健康に當りまゝにおる。
- 。理不盡はこと行とソはれしり。
- 。こんななどるらるうりは。

白感の如く此の如く

。日何憂の悔の石を疎其のし。

。筭のしと云めて得た手色り

格く言を。 日本 1933 三月

。此の以上信用を失墜し居い。

。薄塵の下に

。海晏甘ん注意を拂ふ。

。幾多の苦難を難の陳

をたり振き、今口の礎を

つとむらん。

。此の守れ其の厚の辛を

此の手に献をせん。

